

## ばあちゃん、ゆるいなあー

―名前と生年月日を教えてください。

中村千枝子です。昭和六年五月十八日生まれです。大阪の鶴橋ついでところで生まれたんや。

### 空襲

―おばあちゃんの人生について語ってください。

二歳の頃に、二十五歳の若さでお母さんがなくなったの。だから、母の顔も記憶がないし、父親の母方に育てられたけども、まあ父は、遊び放題。

―兄弟はいなかったの。

腹違いのお兄さんとおったけども…。本当の兄は死んだから、義理の兄と二人だったの。そのあと、父は再婚して、私が七歳のときにね。そうして生活しとる間に、だんだん戦争が激しくなつて、父親が大阪で商売していたけども、仕事の関係で神戸の川崎造船所へ勤めて。

空襲にあつて、父が三重県出身だから三重県に帰ることになつたけども、電車は名張で止まっちゃつて、名張で一泊して、それから父親の在所の三重県に帰つたと。叔父さんたる人が家を探してくれて、まあ、伊勢におつただけど、そこでも空襲にあつたの。それでも家はまあまあ焼かれななんだの。

―空襲にあつたときの状態とかは覚えてる？

空襲にあつたときは、ちようど空襲警報が発令されてから、私らは学校に避難したんだけども。ものすごい数の焼夷弾だもんで、もうみるみる、焼け野原になつて。かろうじて、本当によう生きたなつて思うくらいだわな。その途中で、その辺もう死骸の山だわ。かろうじて伊勢に帰つてきたけども。

終戦になつて、そうしたところが、お父さんが全然働かんときたわ。働かんし遊んどるし、そこへママ母だし。もういじめられたり、いろいろあつて、嫌になつて、集団就職でここに出てきた、いうことなんやわ。

### ふた股

―それからはどうなつたの。

まあ寮生活だで、おとなしい子は部屋で編み物したり、いろいろしとるけど、私は…(笑)。

―なにになに？

私はあの当時は、片目がちよつと、七歳ぐらいのときに病氣したもんで、あんまり見えんくて。細かい仕事しんかったもんで、遊びほうけとつた(笑)。

寮生活の時間が決まつてるんだわ。八時とかなんとかな。だけど、一人で出てけれんもんで、友達と一緒に出てつて、また遊んで帰つてきたら、またその友達に門のところまで待つとつてもらふと。そういうふうにして上手にかい潜つて出てきてた。そんで男友達もできて、遊びまくつとつた(笑)。

—どういふとこで遊んでたの。

—どういふとこでまあ…映画だわな。この辺だったら、だいたいな古屋行ったり、一宮行ったりとか…まあそういうことだわな。不思議なもので、ここで見つかるやだで、とか思つて、一宮行ったら、そこでばったり会うんだわ。ばつたりと！

—誰に。

…ふた股かけとつたから(笑)。

—ええええええ！！！！！！

ある人と映画館行ったら…：そうそう、六輪(ろくわ)に友達おつたから、その友達のところ行つて。そこに違う男友達がおつて、「今からどこ行くの」言うから、「うち今から一宮行くんだわ」、言うたら。ほんだらついてくるんだわ。ついてきて映画みとつたら、付き合つとる男性が、また映画館の中でばつたり会うんだわな。あんな不思議な！

—なにそれ(笑)。

—ほんで、もうあとからついてきた男性は、ああ、この人、彼氏がおるんだつて思つて、帰つてつたけども。そういうこともあつたし、二、三人も付き合つとつた。

—二、三人も(笑)。おばあちゃん！！！！

—だけどがー、おじいさんとの出会いもまた面白いんだわ。

## 運命の出会い

私の部屋におる子の知り合いの人なんだけども、農協のトラクに乗つとつて、私がその眼科に行つとつて。帰りにトコトコと、

こう歩いとつて、そしたらフーツと車が止まつて。「乗せてつたるわあ」つて言つたときに、みたら友達の知つとる人だわあつて、気づいて。その隣に座つとつたのがおじいちゃん。

—三人座れんもんで、おじいさんがトラクの後ろにパツと乗つて、私が乗せてつてもろうて、今の工場で降ろしてもろたんだわ。そして、またしばらくたつて、おじいさんとバタつと会うんだわ、なんも約束もしてないのに。

—運命的に。

—うん、運命的に会うんだわ。あれつと思つて、今度は一対一で会つて、そうこうしとるうちにまた会つて。それから付き合いが始まつて、そうしとつても、ふた股かけてただけどね(笑)。

—また、ふた股かけたのかつ！

—うん(笑)、一人の男の人と映画の待ち合わせしとつて、まあいか、もう断つてまーつとるで、とか思つて。安心して駅へ、八時か九時に帰つてきたら、駅で待つとるわけだわあ、今のおじいさんがな。だからな、この人、ものすごい誠実な人だな—つて思つて、びつくりしたわなあ。ほんでまあ、付き合つとるうちに…私もあるとき、わりと病気がちだつたから、会社辞めて伊勢に帰るつてなつたときに、しばらくして、僕も伊勢の方で就職するわ言うて。

—おじいちゃんが(笑)。

—うん。自転車に荷物いっぱい乗せて伊勢にきたんだわ。何時間かかつてきたかなあ。ほんでしばらく伊勢におつただけど、仕事がなくて、こつち戻つてきたんだけども。まあこの人、もの

すごい誠実な人だなあ思つて、心が傾いていったわけよ。

—そのときはもう、ふた股はしてない。

もうそれからはしてない！(笑)。だからあの人はね、純情な人遊んでない人。若いときはね、レコードあるでしょ。あれにね一生懸命になつとつたから。また顔もええ男だったもんで、女から見たら、彼女おるなつて思われてたんじゃないかな。

それが、運命的な出会いで、トラックでパツて会つたんだでなあ。なんも今みたいに電話がないのに、それでも会うんだからなー、不思議だわ。それから、こういう純情な人は裏切れんなーつと思つたから、もう辞めた。

## 大騒動

ほんで、だんだん結婚の話になつてつて、でも今みたいにアパート借りるとかそういうことやらんから。農家だから部屋がようけあるんだわ。9つぐらい。だけどおじいさんの部屋は四畳半の部屋で、今考えたら二人で四畳半のところにおつたんだよ。他の8つの部屋は、兄嫁さん夫婦でわけて使つた。それで1年ぐらはずつとおつたけども。

ある日小姑がおるもんで、下の妹が弁当作つたときに、まな板の上におかずを置いとつて。その後始末してかなんだのを、兄貴の嫁さんが見て、私のせいにされて。「なんや片づけてないがあ」つて言つたもんで。それ聞いて、「私にかずかつとるわー」「なにもやつてないのに、自分のせいにされた…という意」言うたら、おじいさんカツと怒つて、棒で兄貴の嫁さん殴りに行つたんだ。

よ。

—えええええ！

それから大騒動になつて。ちよつと落ち着いたけどがー、家出よういうことになつて、部屋借りて生活するようになった。それまでは一年間13人。考えられないでしょ、今だつたら。だつて兄貴夫婦、おじいさんおばあさん夫婦、小姑何人おる？ 5人か6人おつたがな。そこにポンつて入つてつて。

今みたいなお勝手したことねえ。それが大きなお釜でご飯炊かなあかんし、それにきしめん、明けても暮れてもきしめんだわ。あれをゆでて、うちうどん嫌いやろ。あのきしめんをゆでるの難しいんだわ。ぺたつとくつついて。

だけどそういうことがあつて、やつぱり新婚だもんで、自分の嫁さん可哀想だ思つて、兄貴の嫁さん殴りに行つた。そりやえれーこつた。だけど、お兄さんがおじいさんより弱い人で、普通だつたら、自分の嫁さんが弟に殴られたら、怒るわなあ。でも喧嘩は、始まらんかった。まあ大騒動だつたけども。こんなことじやいかんで言うて、うちら2人おい出して。

もともと無理な話だわ。今だつたら、同居みたい、しやへんわ。なんか知らんけど、私も、ママ母だったし家帰りたなかつたし。まあ18歳でここに来て、二年間はおとなしかつた。20歳まではおとなしくして…男友達いなくて(笑)。ハタチすぎて急に遊びだして…(笑)。あつちもこつちもふた股ぐらいかかつて…最後はこのおとなしい人だ…(笑)。落ち着いたのがおとなしい人だつたんだ。

## 出産

ほんで1年して、ここのお父さん生まれたでしょ。ほんで洋服のまよめの仕事してて。紳士服の。全部ミシンでぬった後をまよめてく仕事。そんで初めてのお産のときは、どこでもこの辺は実家に帰るんだわ。だけどママ母だもんで、私、家帰れへんかって。

—家が嫌だったもんね。

うん、ほんで生まれてから、一人目のときは自分も寝とればいから寝とつて。二人目のときは、もう上の子が動いとるから助けてもらわないかんで、お母さん来てくれて。三人目はうんと歳が離れてるから楽だわなあ。そんなことで、今はほんといいよ。息子もおるし、まあそれに嫁さんいうのはだいたいなあ、ダンナの母親と同居みてえしたくないけども、ここのお母さんは性格ええし。私も遠慮すること嫌いだし、お母さんもそう気つかわへんやん。だから、そうあんまりもめごとつてあれへんやん。

—ないねー、実の娘みたいな感じだよ。

まあそんなことでございますけども…思い出すのは食べ物ぐらい。食べ物はあるだわ、もー本当にひどかったわ。今の子に言つたつて考えられんやろ。とおらんわ。砂糖はないし、とにかく兵隊さん兵隊さんで、みんな外地送つてくもんで、日本はなんもない。

—何食べて生活してたの。

麦ご飯とか、ご飯の中に黄色い漬物細かく切つて、お米の中に入れて炊くとか。ご飯炊くの今みたいに電気釜じゃないか

ら、焚き物でこうやるわけでしょ。だから今の子はあんなもん食べんわな。雑炊もしらんわな。

雑炊いうと味噌汁の中に具がはいつとるわな。それん中にご飯を入れると、かさが増えるわ。そのために雑炊やるわけ。それにうどんの麺あるでしょ。あれをポキポキつて折つて、お米あろて中に入れて炊いて、なんでもかさを増やす。とにかく、量を増やさなあかんかった。だけど粟だけは食べんかったな。

—3人子供ができて印象に残ることは。

子供つていうと、女の人でも兄弟がたくさんおると、一番上の子は母親みたいな気で、下の子を面倒みるわなあ。だけど、私は兄が父親とあわんもんで、九州行つとるもんで、一人つ子と一緒に、子供そう好きじゃなかったけども。生まれて顔見ると、やっぱり可愛いわなあ。ここのお父さんは一番大きかったな。3500くらい、目方が大きかった。だから本当になかなか出にくかったけどなあ。

## ギャンブラー

—生活してるときは。

生活してるときはまあ、貧乏いうか普通かなあ。借金して歩かなんだだけよかったわ。私の父親のときは、大阪の商人つていうのは、夜通し(宵越し)の金がなくても、明日のお金がなくなつたつて、今日おいしいもん食べたい。私の父親がそうだった。えーもん着たいし、ごつつお食べたいし、大阪商人はそういうふうなんだわ。だからお金ないづめなんだわ。

神戸の造船所で働いとるときは、成金でお金もつた。けど自分の友達が大阪から、焼かれたから帰ってくるが。そうすると、うちの父親は、「さいやん」(名前)言うの。「さいやん、さいやん」ゆうて、夜来て博打(ばくち)やるわけよ、花札。座布団の上にごう花札おいて、ごうやつて、ごうやつて博打やるわけ。夜9頃になるとやるの。あれ嫌だったなー。

ーなんで。

博打なんかやだがー。勝つたらお金もらえるゆうわけだが。今でいうギャンブル。他にも競輪、競馬が好きだもんでお金借りて、とにかくうちの父親は賭け事が好きで…。そうそう、あとおしやれだなあ。着物着て。中村いう名字だもんで、「なーさん、なーさん」だわ。母親が死んで、私ちつさいときは、あつちからもこつちからも私をくれ言う人あつたんだわ。あつたんだけど、私だけ絶対よう離さなくて、どこ行くにも連れて行つた。

とにかくねえ、やらんことなんでもやる。泥棒やらんだけ。自分の兄貴の嫁さんだろうが、兄貴だろうが誰でも殴るしね。殴らんの自分の母親だけ。5人兄弟の一番やんちや坊主。お兄さんお姉さん弟妹おつて真ん中なんだけど、父親が。

ー全員殴つたの。

そうだよ。やんちや…やんちや次男だな、ありや。けど不思議と私だけは可愛がられたな。兄貴は…私のお兄さんというのが、今でいうできちやつた結婚なんだけど。それを反対されて、女の方は子供をとらなんだの。ほんでこつちが受け取つて、おばあちゃんが育てたの。

ーおばあちゃんが育てたの。

うん、だからこのおばあさんというのが、親のない孫を三人育てたていうんだわ。

ーおばあちゃんつていうのは。

父親の親だわ。私にとつてのおばあちゃん。私、母親が2歳で亡くなつてとるもんで、ザーつと育ててもらつたでしよ。お兄さんもそうやつて、父親が恋愛しとつて子供できて産んだけどが、向ごうの母親がいらんいうて、とらんかつたもんで、こつちのおばあちゃんがとつたんだわ。

もう一人はうちの父の姉さんというのが、この人がちよつと村の青年に犯されて子供ができて、それを知らんと結婚したら、相手がいらんいうから、おばあさんがひきとつて育てたんや。こんな感じかなー。

殺してやりたい

とにかく、こんなこと言うたらあかんけど、こんな親、本気で殺してやりたいって思ったことなんべんもあつたよ。でも、それじや親戚に迷惑かかるから、これはまあ自分が出よう思つて。友達もお母さんが死んでおらんもんで、その人と一緒に18歳のときに出てきてね。

女の子にとつて母親がおらんちゆうのは、寂しいことだわ。寮生活しとつてもさ、ああ家に帰りたいなー思つて泣いたときもあつたよ。でもお母さんの顔が分かんよ。写真だけ2、3枚おいてあつたで見たんだけど。二歳くらいのときに死なれたら、

顔わからんわな。ほんでもまあ、人生つて、小さいとき不幸だと後からようなるんかなあとと思った。

—今は幸せ？

今はええがね。お父さんも性格ええしき、お母さんもええし、孫もええし。

—そうだね(笑)。

まあ今はこんな年まで生きて、ほんといつまで生きるんだろ。

—ずつと(笑)。100歳超えてもらわなきゃ。

そんな生きなくていいわ(笑)。だから今のは語ることはない。

—えー、語ることもあるでしょ。

今はあんたたちがうまいことやってもえらたら、それでいいわ。今はほんだけど、昔はこんな一戸建ていうか、若い人は家建てるだとかいうから、共稼ぎせなやつてけれんのだろうな。昔は、学歴なくたって就職できたし。うちの父親つていうのは、農家の財産はあつたんだけど、それも売つて極道息子で、丁稚奉公つていう、着物きて前掛けして…。

—丁稚つてなに。

小僧さんか、どつかの商売屋さんの下働きつていうのかな、女中さんみたいなもの、そこで店で使われるの。そこで仕入れられて商いの人になつてくわけだわ。大阪はだいたい商いだわ。だけど、大阪いうのは14歳までおつたけど、ほとんど記憶にないな。父親が商売やめて川崎造船所に行つて…。

神戸の駅降りるとみんな、ずらずら川崎造船所行く人ばっ

かなんだわ。今考えたら、神戸の駅で降りたらだいたいどの辺に住んどつたかぐらいわかるわ。もう神戸の駅も変わったやろうなあ…。

伊勢は2年しかおらんかったからなあ…：学校も空襲で焼けてから学校いかれへんし、近所に洋裁と和裁を教えてもらつて習つたわ。そういうの習つて人の仕立てものの服つくるわな。先方へ渡そ思うて、お金もらおうとするわ。はや父親が先にもらつとるでいかん。働かない、そんだけ。私の工賃もらつちゃう。ほんとに働かんし、酒は飲むし、おかず気に入らんと、ダーツと飯台ひつくり返すんだわ。丸いちゃぶ台だからなあ。こんな父親はいらんと思つた。

だけど、兄貴よか私の方を可愛がつつたわな。兄貴は、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」つていう諺があるように、相手の女のほうが親が許してくれんもんで、向こうが結婚あきらめて、こっちがとつたわけでしょ、子供を。だから結局兄貴は、可愛がられんかった。兄貴は可哀想にあつちこつちつてたらいまわしにされてた。

—昔はいろんなことがあつたんだね。

昔はそうだわ、私は父親に殴られても泣かんかったらしいわ。近所の人がいう話では、あんたは強かつたんだにーいうて。そら泣いとれんわな、母親がおらんで強く生きていかないかんで。だで、学校でも、私がおるで学校行けへんちゆうて、私がいじめとつたらしいわ。ほんで、何人か並ばして、おやつあげてたらしいわ。

—え、おやつあげたの。いじめてたんじゃなくて。

そーいうときもあつたり、学校行くときに、なんか私がいじめるから学校行けへんいう子もおつたらしいわ。私は今のとこ、大昔だからわかりませーん。もう忘れとる。

### おだやかな生活

— そうなんだ！ 今はおだやか。

うん、そうでございます(笑)。

— ふふふ(笑) 今はいいいね。好きなものもあるしね。嵐、毎週みてるじゃん。

嵐かー、癒されるわな。孫がもう嵐、嵐いうとるで、私もみるけども。やつぱりああいう若いエネルギーもらうと癒される。私のおかげで、70代、80代のコーヒー飲みに来る人でもさ、初めは嵐つてなんやいうとったけども。私の話聞いとつてほんならみるわいうて、みたら、あつ、癒されるわつて言つとるがね。あの5人は性格ええんだつて、言つとるわ。

— ばあちゃん、誰が一番好きなんだつて。

顔としては松潤。でも、相葉君が一番好き。おとなしそうな顔しとる。

— おとなしい人が好きなの。

自分が性格強いから、おとなしい人がええのかな。

— じゃあ、おじいちゃんもそう？

あの人めちやくちやおとなしかつたなー。あの人はねえ、男の子3人育てても、殴つたことない。でも、殴らん人はくどいんだわ。一緒のこと何べんも言うんだわ。だから、上の息子たち二人

は、学校卒業したらすぐ寮生活。ほんだから、大きなたらすぐ出てつてまうが、この親父のために、とか思つたことあつたな

— 。

まあいろいろ話してきたけどさ、その結婚つていうのも早くに18、19歳とかで結婚すると、遊ばんうちに結婚すると、結婚してから遊ぶもんでいかんのだわ。だからよく遊んでから結婚しやいいんだわ。

— ばあちゃんみたいに(笑)。

うーん(笑)、私、おじいさんが浮気しようとか、なんにもやきもちわかかんもん。どぞの人とカラオケ行つたり、車乗せてどつか連れくとか。そういう連れて歩くことはええんだわ。浮気つていつてどつか離れて出ていく、あれは気がちつさい、そういうことはようやらん。

— わからんよ、隠れてやつてたかもよ。

してないがねー。離婚してないもん(笑)。あの人はね、騙されても、自分はよう騙さん人だよ。

### おじいちゃんとの別れ

— じゃあ、おじいちゃんの病気がわかつたときは。

歳いつたらね、夫婦つていうもんは一緒に部屋に寝とらんと病気が発覚できんわ。一つの部屋で寝とると、お互いにいびきかくやん。あんたのいびきが大きいと寝れんわいうたら、そんなこと言うけど、おめえのいびきもえらいがやいうから、お互い別々の部屋で寝とつたの。

そしたら、ある日、この乳の周りにカサカサにできとるもん見せてきたもんで。デキモンできるとかさぶたできるやん。それかと思つて、タコの吸出し貼つとつたらいうとつたの。そうしたら、別々の部屋に寝とるで、相手の体みいひんし、わからんやん。

そしたらしまいに、膿が出てきて、それが乳がんになつとつたの。男で百人に一人ぐらいだわ。だから、「手術せないかん」なつとつて、手術する日にちまで決まつとつたのに。手術する日は食べていかんのだわ、朝。「せえへん」いうてダダこねてさ。

—おじいちゃんダダこねたの。

気がちつちやいんだわ、切りたねえんだわ。ほんで、手術したんだけど。早期発見しんかったでね。あんなまさか乳の周りにかさぶたみたいにできた、あれがガンだと思つたらんかった。あの人もと生きたかつたと思うよ。八十ぐらいまで。だけど、逝く年七十二かな…。一緒の部屋におつたら、どういうふうになつとるか見とつたけども…。

—私が病んでたときはどう思つてた。

そら、もう可哀想だつたわな、高校三年生だつたけども、もらい泣きしたわな。なんでああなつたんだろ。お父さんに泣いて喋つとつてさ…。ここでお母さんが頼むから、学校行つてつて。親子で泣いとつたわ、本当にもらい泣きしたわ。可哀想だつたわ。

—半年間行かなくて。

なあ、うん。あれ本当にそういう病気だつたんやろか。でも三月に治るつて言つたから。

—うん、三月に治るつて断言したら、治つたね。

ね、今その高校生がここ通ると思い出すわ、二年前を。あー二年前あの高校通つたんだ、この道通つたんだつて。二年前はこうだつたんだけど、よかつたなつて思い出すよ。

—二年前は、半年ぐらい学校休んでたもんね。補講の期間、ばあちゃんが迎えにきてたことも、覚えてる？

**病気は自分で作るもん**

うん、学校は、本当は隠すとか、その子辞めてくれ言うんだわ。でも、この学校はええわ。他の先生も協力してくれたし。前の担任の先生とかそのときの担任の先生とか。普通だつたら前の先生とか来んことない？

—来ないよね、関わらないよね。

—関わりたくないわな。先生はなるべく隠そうとするわな。

—今、だいぶ傷は癒えてるんだけど、あのときはリアルすぎて言えなかつたこととかあるじゃん。だからあんまり話できなかつたけど、おばあちゃんの立場からみて、私はどういふふうに見えてた？

うーん、だけどあのとき私が思うのは、あの年私がおつてよかつたなと思つとる。私がおらんだったら、お母さんもお父さんも仕事に行かれへんじゃん。お母さんが、あんた一人おいといて会社行かれへんわ。あのとき、私、役にたつたと思うわ。こういう子おいて会社行けれんわなつて思つたもん。

—毎日泣いて、家におつたら危ないよね。

—一人おいて行けんわな、なんかあるかもしれんぞな。だから、



まあ役にたつたと思つとる。まあ今はなんかねー、左肩が痛くてね、肩がこつたんでもないんだけど、なんもやる気しんのよ。だで今は、ごろごろしたりラジオ聞いたりしとる。

もう今にね、これ一か月になるんだけど、結局自分で病気づくるんやな。ああどこ痛いかな。次ここかなつて、自分でそう思つてしまふんやわ。だから、なんか熱中しとると忘れる。前は、本当のこと言つと、あんたが帰つてくるのが遅いやろ。

—え？

ほんで寝れんようになったんよ。ガチャつとすると、ああ、帰つてきたな思つて寝れるけども。だから寝れんようになって、薬飲むようになって。一年ぐらいになるかな。それ、あんたのせいや(笑)。

—私のせいや(笑)。でも最近は、早く帰つてくるようになったことない？

でも、飲み続けたら、後もう先、長ないでええの。

—ほらまた出た、その話！……！……！

—そんなわけで、まあぼちぼち。

—ばあちゃん、ゆるいなー。インタビュー、ゆるすぎる！

—とりあえずまとめましょう。

人生は山あり谷ありです。はい、一時間たちました。ええとこ、かいつまんでやつてくださーい。まあそんな感じですよ。さて、夕飯作らなかん(笑)。

〔二〇一二年十二月〕